

あべななさんじゅうななさい

アッフゥフン!!

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(*。▽。)。〇。 ミニミン！ミニミン！ミニミン！ウーサミン！！

目次

あべななさんじゅうななさい

あべななさんじゅうななさい

それは、何でもない日の夜のことだった。

「あれ、ナナちゃん？」

「へっ？」

仕事からの帰り道。聞こえてきたその声にはどこか聞き覚えがあった。

「あ、やっぱりナナちゃんだ。テレビ見てるよ」

「えっ……あっ！」

少し記憶を漁れば、すぐに思い出せた。ナナの同級生だ。

「凄いなあ、会えると思ってなかったなあ。何年ぶりかなー、高校の卒業式以来だから——」

「わー!! わー!! ストップ、ストップです!!」

ちらりと後ろを見る。今日現場が一緒だった事務所の皆がこちらを見ている。

彼とこのまま話していたら余分なことを聞かれてしまう。

「ちよ、ちよっとこの人と話すことがあるので! 皆さんお疲れ様でした!」

ちよっと無理矢理かもしれない。明日、色々言われるかもしれない。い。

だけどいい方法も思いつかなくて、彼を引っ張ってその場を離れる。

「他のアイドルの人たちはいいの？」

「良くないけどいいんです! 緊急事態なので……」

それからちよっとだけ歩いて……どうしようと頭を抱える。

勢いで引っ張ってきてしまったけど、ここからどうするかなんて考えてない。

少しだけ話して、はいさよなら? ……それはちよっと、薄情が過ぎる気がする。

久々のだし、ちゃんと話してみるのもいいかもしれない。

「わー、ナナちゃんとご飯食べれるのー? 嬉しいなあ」

ほんわかと笑う彼を見て、変わらないなと思う。

彼とは特別仲がいいわけじゃないけど、それでも男子の中では喋ることが多い相手だった。

彼を連れて居酒屋へと入る。ここはアイドルの皆でよく使う居酒屋で、個室を用意してくれるから使い勝手がいいお店だった。

「——ご注文の方、お決まりになりましたらお呼びください」

「あ、すみません、とりあえず生を二つ——」

「あー、生は一つでー、レモンサワー一つお願いします」

「え」

思わず声が漏れる。最初は生で乾杯するものじゃ……？

「ボクー、ビール苦手なんだよねえ。美味しくない……」

「へ、へえ……」

ビール、いいと思うのだけれど。こう、のどごしがですね……。

「でもナナちゃんはすごいねー、ビール飲めるんだー」

「ま、まあ……」

「17歳なのに大人って感じー」

「え……？」

「あれから十年くらい経つのにアイドルになって」

「あ、ちよつとその話は」

「ボクなんかもう腰が痛くなることもあるのに、ナナちゃんはテレビで踊りを披露しててー」

「やめて」

「ナナちゃんはずっと17歳なんだもんねえ。ボクはもうにじゅー」

「ノウツ!!」

まさか彼は、ナナが本当に永遠の17歳だと信じている……？

……いえいえ、確かにナナは17歳なんです。それは無論事実です。

「……本当にナナちゃんはすごいねえ」

「えつと……？」

一瞬憂いを帯びた彼に声をかけようとする。

けれどちようどそのタイミングで店員さんがお酒を持ってきて、話が途切れてしまう。

「それじゃあかんぱーい」

「……乾杯」

踏み込もうかと迷って、結局彼が話題を振ってきたからそのまま会話が進む。

彼の近況報告を聞いたり、ナナのことをテレビで見ているという話を聞いたり。

実はライブに来てくれていたというのには少し照れた。

「……ボクさ、会社で上手くいってないんだよねー」

アルコールが回ってきた頃。彼はぼつりとそう漏らす。

「ほら、ボク昔からとろいーとかよく言われるでしょ?」

彼は苦笑しながら言う。

「だからテレビでアイドルやってるナナちゃん見ると、すごいなーって思うんだ」

そんな彼を見て、気付けばナナは口を開いていた。

「……確かにあなたはちよつと、人よりゆつくりしたところがあるかもしれないせん」

覚えている限りだと、彼が言うようにおつとりとしたところはあつたように思う。

「でもそれはちゃんと周りの皆のことを考えてるからだって、ナナは知ってます」

ナナが仲良くなったのも、そういうところがあると知っていたからだ。

「きつと会社にも、ナナみたいにあなたのいいところに気づいてくれる人はいますよ」

……ナナの言葉は彼の助けになったのだろうか。

彼の様子を伺っていると、彼は覚えのある笑みを浮かべた。仲良くなつてからよく見るようになった笑みだ。

「……やっぱりナナちゃんはすごいなあ」

彼の空気がどこか変わる。ナナの言葉は届いたのだろうか。

「ボクね、実はナナちゃんのこと好きだったんだー」

「へー……えっ、へっ!？」

頬が熱くなるのを自覚する。好きって……多分、そういう意味ですよね？

「高校の時、今みたいにナナちゃんが勇気をくれたんだよ。覚えてる？」

「今みたいなの……？ 何かありましたっけ……？」

首を傾げたナナに彼は苦笑する。

「だと思ったー。……うん、だからナナちゃんはすごいんだ」

納得したように頷く彼は、やっぱり覚えのある笑みを浮かべていた。

「ナナちゃんは、昔から勇気をくれるすごいアイドルだったよ」

その言葉に、嬉しさからナナはちよつとだけ涙を浮かべてしまった。

……最近涙腺が緩くていけない。

ちなみに原因は別に歳をとったからとかではなく、そういう体質なだけなんです。